231
69
5

準貴

小川芝舗

五本尾

夏合之古筑

一

かたもなくてうるまるらんと云つは出と梓に彫させ其序に[illegible]

[illegible]

附てらふ 此下ニ編アリ平意此附説異テオフル モノナレハコヽニウツサス 是ハシテケレハナリ

百人一首古説序

夫ことのは乃林はいにしへ山口とうたひおきし
ぬへなかと是ちかきよりあひとなりぬれは
ゆくさきはいよゝ遠くわけいりますくあると
思ひなんさるに百くさのことの葉乃林あり藤原
の定家卿その書のなかに其詞はまことに定
達に作て新古今和哥集を撰らせ給ふに定家
のきみは其いつくしの数ふかきをしりて父の実
の父乃おもひよりことにとりて論ふひあることとやるか
ゆゑに山蔭のうちにぬきんかるあらんなし

宇治藏書

[illegible]館藏

て橘の花耳ばらざるを橘とは名月抄に
会式家の障子に書て人に見せとゝ申すなり
いとゞ遠い平乃常縁てふ人宗祇てふものに
導りるこのあるらは晴に慈仁乃法みぶれ
て春日聖乃烽火多ちはふる於田山の白波
さらくもゆ人〳〵遠び学ひ乃道しるへ多之元
このゝ橘ちらは捨てちりけとうふあひて
新なる能多る兒いあるとも文乃くもある賢き
ハ能ゝ人〳〵ちあれい浅茅ヶ原の標ちるへく
とゝ山乃ゝへ多ゞ〳〵紀みちゆ引も侍るなり

建仁四年二月改元云元久
御代之名謂年号見元亡紀之記或文徳実録

今退て考るに新古今和歌集に建仁三乃ゝ
四月ゝる五人の遠い成く奉り同一四の年で
法代の名改めるとこゝ元久とゝ其十つる時
元と月の三十日に於ん後成乃卿いゝもひる
俗今元久二の年三月ゝ世ゝ行りはるまて祇
ゝも其撰い五ゝ八の月に於ゝ母ゝ祇喪り
居ゝ其末ゝ分ゝ三十ゝ四乃
日数ゝ多ゝれば藤衣おゝ多ゝてしも
ゝ推柴乃誣ゝとゝて閑ゆれ沒
元久二の年ゝ三十許乃春秋と也て猶新勅

元久ヨリ天福元迄九二十九年

拾遺和歌集をえらみまうしたまひしに紀貫之入道
貫之とていふ人ありけるを待ちとりて
ちはやぶる神の御代にもたつたの川
唐土の海の波をわたりて千代の家
造りしるしかへる波はあり
おとはなくはつ雁の声小角笛
及びぬべしとぞ思ふ荷田の東麻呂うしとは國の
ふる乃林に入て泉はやみ柄舟木月乃か
つら星乃林とゝへども高くひろ深くとゞむるふ
博て定家の卿の文暦の日記の中にはなかりしを
はるかに見えたり云ゝ二年五月廿九日乃日

此日記或称嘉禎之年記然文暦三年九月改之号嘉禎

記ゝ時ゝ文字と書り
とゝと嵯峨の中院のちゝの紙歌書
迷ふ道入道とこゝろまと極えてゝ
しるべきゝへも行まひ第を深ておくる
いすへゝ神天智天皇ゝこれとゝ
さ経卿と夜ゝいて金吾ゝ先しおるゝの
くゝと行ゝ月夜おはつかりしゝ
ふる月ゝ月ゝ時ゝ多ゝ或人云
日記のゝゝにゝ水ゝの事ゝして
神の授ゝゝあゝゝと答曰ゝ行ゝ

あらと雖ども荒れあらしかりそめのうらもさしも
草ばかりもうらめしき野辺のとまやつくまもふ
べきなれどもどし山の奥乃さつしかの秋の田もる
ぐらう海へきあらい何のふしようあるさむ
いてやそのいさはしらをいたづらに石くさと
いへども石ばりみる毛秋をとゝろ一さひつて
ゑん人四ナあるうれ学くのすぐ沢といくあ
ろつのこれその林よ入河へよ山にもあるう
故よ是を刈るよりい松はまはもひ沢をき
長縄の一ぬるうて栗はみ乃三のりとふらつ

べ一つよ其世二つよい其人三ハよい其世ろ
れう中ようといへもて下て今ちう乃ほるべ
かするあるいうるふのゆうて四ゑとるあい
何乃渕も面りむくるふあうて水脈び
きとる筏いうつう乃流れをとひろくわく
抑東方ハ山ようるて五十あるうの
こ一月を絶ゆわり空方ハ見ちくは吹
あがらてもと乃林のうてゆどくいさほ
松かんすかれい今松人の斧よぶしとへども
ひあくし乃とう縄よりて木ハうをとと

こゝにはるの是やとしをへてまちかねつゝ
するしかつ宮あれさしふかれる
ゆく

賀茂真淵志留須

附記

凡定家卿年譜ありてなまきあるこゝ可ればとぶらい天福年
中より一人のゆゑ成る新勅撰和歌集を奏へ一其後文
暦二年に夏渡城の中に院の入洛の需よりて世をそむき
紙形を書て勝れられ給ふ歌のこゝろ
くれに撰しおいてあるゆゑ
なる明月記の文をもつて
あらためて撰ふ
まるまるとこゝろ
こゝろあてにするべくもあらず
りてくわせる事い先つ
文ゆゑ
あるこゝる代より今まで
ちゝよはくへゆひろ

されたるこゝろをいひてさとさるゝなるへし
凡従字のすは弟かまんなれはせらる事なきに似たれと
その間にたとりて古き従字を定めんか上へてさゝ
ふところの色ふかき従令祖母 古書に祖母と書 源氏物語 栄花物語
祖母とおほえとそゆれ苦あるの間ふかき木の見伯母叔母なとの
り 伯母とおほえとかきうまくれは人のあやまりうり 大の母のちゝいは小の源
路とかゝるなり 就は大乃暑にておはして 母のあきいは小の源
兄こそ 兄のあきとてさ乃御名を意計(オケ)とは申し 弟見
ことましませは 弘計(ヲケ)と申は御弟にますゆゑに
いけの名き 古事記に即意富祁(オホケ) 袁祁(ヲケ)としるされたる 是らは兄弟一つと挙て
作りとべての古語は皆きなこともどもしるしと
いふなるれはその語を解くも今書るも 古事記に
まさりぬて和名抄までの古書によられたる 或人いはく
いまはかへらのきたなうりしや 甚従のゆるそのにち

さの世にめは作りますとけしと思しか語ししうちたゝう
ふ和名抄より以前の古書にはいと万のかぎり作りいん
みな同し之 従字みへことゝ論せし 抱は抱れとも上代よ
ありこともみなひきまとおへいやしきの学の作り
すえし今より前と六百年くらいはいち朝廷の式法は
ちくはうちあれは学の道もさとうる論とあるかり
とのしぬめる人あしして日本の古学せる人一人もゆるさ
るゝなるくはしらしこととまへて昔れ端とし
なりける今は東にかく天か下をそくこてのへきそのひてゆる
のちふかむひしよかつる抱社あくなりまし迷てり眼を
ひらきて古書をよんいらつりさとる人へしされは皆去
百年からより以来のりなまよいあらつかる人あらし
む庵のうらい

凡百そなはるなる人ともなりきさせる
なる人とも入られし宮家の微志なりとも
仕なるまこと不道とこと所ふるるい人万呂卑人
あるとやりとてるい物の多人と百万つくとへ
かるかるかりるんるれ物られいかりくさる
忘あるとる甚上とを分とこて大るこも拭まれつる
ものえるこるいあるるとやはけたの古い物
るくんなぬ人のちるる世る書くいへるるるへしさいやう
るるこれるる童れるあるる 自の次下る仕とこるへしそれ
う中る偽説の疑しる多られい正しる物るちるとるく
いるれ考かるる物い大系圖ともれる 公山補仕も
ねとのこれる昌泰のひり上るい偽仕とこるれるるを仕太部記
古書のおるれ昌泰のひとを巻のりり大系巻も十四年と巻と月日
凡け色紙定家仕乃筆物るい五十物者といるるれも其

かも自の物とあるふ問しるあるる物と巻四そ上
いまる沙とはされい物百そるふるへし旦そと
い倉れる紙とるるい物世の流言うるべし今も公家さる
物るるるる下冷泉家れれるれ乃山のあ偽正の
語られもかのるるる名問い物るかの中納言いの
まひしとと仕りりるりさりるるるさる
凡人乃いへる説とるるふくきるなるるの人るる
とる友いとるるきるいるるてるるきるる色津るる
へるるあるる物とく荷田東方長いるく家門る入れ
る人るるるるるるるるるるるるるるるるる
古き徴と理のあるれ家と仕と考えるるるるる
とい師父の語るるとも用色色かる次形とむるる
てるるる解色学るい天下れ物師父の家れるるるる

は井の蛙なおりひかりとて作り今ハおのかふら
いつる説よハ誤りこそ見わらわさるとハいふん人へ
ことあるよ告まりんりし　理りあるよし　ぬつるてと
こふ也し

百人一首古説巻第一

賀茂真淵著
荷田在満校

天智天皇

秋の田乃苅ほ乃庵の苫をあらミわか衣手ハ露にぬれつゝ

後撰集秋中　題しらす

此歌よハいと論ある事なり先まつ

いふ万葉集よ詠ミ田とふどしき詠ねる

へしさましとある田をもる賤か上よして秋の

田よ從乃庵を作りて浦まりとゐるふもと

よりかりそめよ作ふなる苫乃庵し也

葛󠄀原ある本の字ト人ゝ多くハやゝタカヘ化名ヨシキハイロハスカノ本ヨキ本ノヒ要ヲトリテ注ス下同

殊りいかにとハへさて略たる
なりおひおろそれもんて
といふとし
かりかの庵ハ例の愈的説也
毛詩云農人作廬以便田事

あらはれいもきあれば乃乃乃乃乃他のいろ〳〵
るとき古へ乃乃乃乃乃ふいひのへる
もゝの伝しふることといへるひ〳〵さありひ
やられてあらはれと上古の文とうくんてな
世乃ゝ乃ゝとこれ多〳〵時を知べるう
さて句〳〵乃語例事実の論ゆとい次〳〵よあ
〳〵〳〵べし
こ是ゝ三乃論あると其一つよいかりは如ふい
音便
なり乃ゝ乃ゝい或説ゝ宣ね詞ゝとへも
凡古文ゝ宣詞ゝ體用あり同辞別言あり

設て多〳〵ぬもるあり万葉集巻の十ゝ
秋田苅借廬作五百入而有藍君叫見依毛欲得ま
さ秋田苅借廬之宿乎穂経及るとまい上の言い體
ゝて次のいひ〳〵て又乃ゝとふい其言ゝ入言
ゝて次のいひ〳〵同辞別言とい即秋田苅借言と
る義ゝて用ゝ
いひ岸ゝる波ゝ〳〵やの類也設て多〳〵る
とい叔人乃良跡能見而とふ乃ゝ然ゝ
今ゝはの言ゝと言い流ゝ一語のかさねるもの
なりさい苅穂の言ゝと意ゆんも古ゝ
例ゝ多〳〵ゝ

乃庵のみかりふまでとさなる物れと書けし
右もいつる万葉の秋ま詠花とふ説とて
秋田苅借盧之宿尓穂経及とゆると唱へあがへき
るぬれぬれは詠とくべからと其二つまい萬葉同
巻より添や添とふ頭ま
秋田苅借盧乎作吾居者衣手寒露置尓家留こ
れ心詞全く今の此歌のあれは此万葉の歌の轉訛
とみえあり　拾撰集古今集に次て賞せる中ましかも万葉の歌は混淆へ入作者まつらして
も混ありまちつきに古今集の歌さへ混り入あれは定家
卿のおれとも草稿のまゝ伝はれるならんとそのう今
拾撰とやかうるは似けれとも古人のおきさへ書を混し今よて
少くて事実を論せさるは学者のいむ事に古今後撰も今

高　万葉考作者

のなきは混せることをおこいは世好さる人の
傍書又は傍りてかきつ今とせしかと思ふ其ハ三まい日本紀の
齊明天皇紀まて皇筑前の國ま行幸ありて朝倉
宮ろて　土佐國の朝倉ゐいありとて筑前國上座郡の
朝倉なること或人の説ありなれは九州の説諸
うるねは甚近きのなきなり
ころふも差なまくりしくいひとを崩まへるしるそしくしく
冬十月癸亥朔己巳天皇喪歸就于海於是皇太子（天智天皇也）泊
於一所哀慕天皇口號曰
枳瀰我梅能姑裒之枳舸羅儞波底々威底舸矩野
姑悲武謀枳瀰我梅弘報梨
一万葉集巻一中大兄三山御歌の反歌よ
高山与耳梨山与相之時立見尓来伊奈美國波良

し等て実は皇太子のこゝの御製なるも上
古乃ときこゝは御製なるべい萬葉集稙
苅田のとき作りしとふい後の人こゝに秋
田のときとられいまこゝるゝふ後て孤
仁徳の御之孔日本紀万葉集等いろはの
ものの乃りゝ也澄徴ともこゝるゝれは對
して考ふい秋の田乃面い天智天皇御製なる
事明らかなり
右のゝゝ作きい万葉集の秋田かるかりほを
作られをきい衣の をゝく家置るとふ

家代こゝて先解べ作き作い作るゝ居い作るゝ
て稲の穂なるゝ前を作るまて守れとも河
をかこれんう為ふ秋田苅かり海といて吾右の
吾ハかるき河之同巻う
秋田苅客乃廬入尓四具礼零我袖沾于人無二こ
乃れ作るゝ家て我といふことのかるふ作へ
まる

大坂手呂敢来者二上尓黄葉流志真礼零下塩
除倉右大臣の第根路を吾作れい伊豆の海やゆの小島は
泥のるゝ面こゝ作こゝ
くん作い等の面いゝ
ゝきかるゝ
さて泳ぐれい必し

守人なりてもそれをうてもむすいはせの
紙海を用さるいとの天智てはとの市製形
ともいとあく解へ（後ていも紙解とい弟子の法師の
ひなかいろろくはこ記をろ物をこと事
あいをろこと）
○時世の歌ともかうこと古へをもはまる人
いはゆる疑と記ことこと他のうはをも求
ちとをこ（古へをへ／印はず）けこと強くこかんとをるを法
製こ作ふ田家此人のあるそれいうも
解こ○て或ハ王道の衰とおりそとこと
し時をるのこあくはと王道い日こを盛を
（即代の元年の今をとをとをこ大はりをて）
こもあを或ハ諒闇中此法をこをうは撰集の

秋部の中を。入るふ故をもむて
附会の説形こことやそ定家郷も事の
（詠歌）
（京にもらへる）
をりひきくく人のりてわして賜る歌
京入れる書へや又腸白まて田家の色を
いひつめ来てをてるてふをもはるう
第四句より勿忘は天子此御自らのること
ひていう此前尾をあること
○是若とあくしとい秋更て若しはぐらに
（八麻利の陽りこ）
於うめるこふ第こと作る説も法こあくし
みみりいあくくしてとふ詩へ上の河

切て云とい下よいひ[illegible]んとする時おくと
くしけてよといと[illegible]得さらひてら
いよく[illegible]を法とるうへし

譜

皇考舒明天皇皇妃寶皇女極斉明皇
中大兄御諡天命開別天皇又天智と称ない奈良朝
の人淡海真人御船代乃天皇の御徳を考て二字
を称まれうと日本紀私記にとるせり御在位十
年近江宮に大津崩御已上日本紀に百又紀御陵
御葬等のことゝ[illegible]ふべてある乗して和の遠慶
のことゝ[illegible]ないと[illegible]付

[illegible]
[illegible]
[illegible]

今の淡海[illegible]ふ[illegible]ある山科の境の山に葬
奉りて御[illegible]ら付へ[illegible]ばどせるもちあり拙て
[illegible]べし續日本紀又延喜諸陵式も[illegible]諸
陵式云山城國宇治郡山科陵近江大津宮御宮
天智天皇云云又田系天皇とふ[illegible]へるも甚しき法[illegible]
て申さ[illegible]續日本紀光仁天皇の紀と[illegible]しけ[illegible]
[illegible]

持統天皇

春ゝて夏来るらし白妙の衣ほすてふ天乃かく山

万葉集巻一云　藤原宮御宇天皇代天皇御製

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

新古今集夏上も入られあれとそれいはのとあれ

ハ此万葉集にて同巻二の人万呂の長

歌ニ吾王之高市皇子萬代跡所思食而作良志之

香来山之宮とあるい皇太子高市皇子乃宮さゝ

ありるゝそれい天皇は宮より行幸ありて其

宮殿或ハ官舎ゝてもいふれの家に衣

といふことと衣の敷てある

改

ゝ元夏ハ衣を曝涼なるいしなれいそれ人ゝかた

して夏ハ来りりとおぼしるとよませる死

ハ此の歌ハ人ゝ此のまゝ死ハ世の意りて知

へからぬ皇て拙るゝ時前夏ゝ又いまゝ言葉

てもあれ香山の文ハ行幸しのまゝ宮中の

衣桁ゝ掛ゝ衣の乾てゝ居らんゝてこい夏の

来る日衣を涼しゝてあるいとハ戯よりませる歌

ゝ衣ゝ干せり天の香山とゝてうぬのゝよ

ゝ

ゝて戯のゝ

天皇持統也賜志婆媼御歌

不聽跡雖云。強流志斐那我強語比者不聞朕戀尓家利

志斐嫗奉和歌

不聽雖謂詔禮詔禮常詔許曽志斐那波奏強諸登言ク

もあれ御戯と仰られてもせぬ香ぞおかしき

さて題の似るいまとなり四の常陸の国

筑波祢尓由伎可毋布良留伊祭手可毋加祭尓之吉兒

呂我尓努保佐流可毋麦十ゑ

寒過暖来良思朝日指淳鹿山尓霞軽引れ

らゝ且むゝい匂とふといおて或ハ冠辞

俗云桃 とあるふ 或ハかく蕨とゝ

先書るてとく拾ふおりるに匂海ゆるとと

おりへるいは世の俗ふり蕨豆ゑ似る

詞ゑ仏語い俗侍るて

口第二句と夏来るらゝとゝもい語ゑ

仏字義ゑて書るゝ而ゑい一二語と上下ゑ

ゑへてもよめど俗字ゑ良之と書るゝ上ゑ語と

ゝ思ふ理ゑしゝと蕨ゑ来良之とあゝい上の

蕨来と於ゆ次の来良之とゝらしゝもゝへ

ゝれと為字とゝんゝと為ゑゝる寒ゑ暖ゑ

良之ゑまゝい寒ゑ暖ゑ者なゝ仏俗とおりへ

古来凡新物を喜ぶこと世人の常なれども清い言葉を辞れいうへてなつかしし故に新つきあるべしとう喜いきぬ〻〻とうもむへなるなり
けは中きぬ〻〻いと新世の
羽をとれい月日へ〻〻と

○白ぬい絹布の名あり故に万葉等に古書り
白細布とあり〻〻兼布とあり〻〻と訓して
或い白栲の袖或白木綿之吾衣袖とも書る
〻〻初へ〻〻白とい深ぬ絹布い白れい白白
波乃白のと〻〻へ〻〻るれ〻〻てさせる事歟
古代ぬ〻ぬの字をそるい俗借り雄略紀り
飲激能古歌多倍能波伽摩烏 延喜式祝詞式小

明細布照妙青和幣白和幣とこてのふ
拾遺に織布古語阿良多倍一方葉に兼妙絁布衣ともいい
てあり〻〻へい兼布に我妙とあり〻〻て妙りと
〻〻へ〻〻る一日集喪中に服惟とよも
白細布餝とあり是らみるぬ乃字義るぬ
事初へ〻〻化の語源るれ〻〻ていも歌なるる
布の如く〻〻も異るけ白細布と白るるも又い白細
白栲尓衣取著而白妙に言白妙に又い栲の穂乃
類り〻〻かる新いまる敷ぬ世る〻〻へ〻〻
る〻〻れ衣乃類に冠〻〻へ〻〻れい〻〻へ〻〻と
〻〻へ〻〻れ衣乃類に冠〻〻る冠挿して冠乃
〻〻り〻〻る事歟〻〻〻〻る白ぬと書る字義り

又おもふに川曽隆家の説 俗によりて乾有と混じ 多くあるともおもへし

よりて明白なりとおもふ説ハ古書に委しからす
さるを（古書にハ正訓借訓義訓相混せりよく古説の俗ともおもふ義とを参考して説をたてし）
○乾有ハ仙覚ハさるをせりと訓きり曝涼の義
なりといふ是なり古本仙覚點ホすかへりと訓せしハ
非なりいふとなれハ若多ふに詞の下に有の字ある
書なりいふとあるれるハ假字なる所においり
紐不鮮在年（ヒモトカサラム） 春無有来（ハルナカリケリ） 君相有香聞（キミニアヘルカモ） 言有（イヘシ）
者香の類なり故に乾有如二字をさるをせりとの
ほしたりとよむへし義ハ右にいふかやし又ほ
とてふとあるハ大に誤れり是有の字をとるそ

[illegible]

とふ例なし甚工てふいふと云ともいふ詞まて叶山ち
前く衣ほしあるてあしをといひ備ふるにあら
ねハおきかしきなまとねよかろふハ物くと云といふ時ハ由
をとよハ来るて用る事もあれとも御製
不けなり凡万葉集よし叶詞とちふよふてこのなち
又也布ともあり これハなり 右のちふやと弘仁以なれ
二廻通してふふなり（中略之） 叶詞寛弘も保年との以も 女の方なとよハ誤りあるこ
とありな今く
いぬのもうへなり
○天乃かく山ハ延喜神名式云大和国十市郡天香山ニ
坐櫛真命神社斉明紀云使水工穿溝自香山西至石ニ
上云々万葉集巻一云

埴安乃堤上尓在立之見之賜者日本乃青香具山者
日経乃大御門尓云々かくれこそ後京極殿の西の
ちりくあるよいろんめれと今い唱へたりつるよ
や土人のかくいふといさせる山ともいえて侍るを
或人い其名ハ小天神山と土人のいつる是なんと云
今も伝云の神人等ハ天神山のさも侍へ　或説ハかくいふ山
ちとうとうとて祭りとるとこと侍るとう
うしろ今いきくうらうしいとも山い大ハ高ることもも
ゆるねいかふふふうそうう低くうるゆるいあるとし説い用ねし
且天ハいつ為ハ天ハ配せる例とて上ちない行し
ちともふふもしよハけ詞と冠すしもうう
天のうるゆ天天津かなぎ天津とうて等ハ
金木　節せ

いふ海あ〜す
ニ香具香久ハとせるい低宮ろう三史ハい香山と
のし書てかぐらきいとハ義なるとと香菓を
かくれこのしと別せる類ハて詞と下略せるく
さて日本紀ハ香山（カグヤマ）に此云伽倶夜摩（カクヤマ）とあれい濁訓ハ後
せう或説ハい清てしうもうしと義も授も
かるとさる説ハもこい清ハへうとと　ハ世濁音ハ
陸て清ることも侍ると古実を又古ハ記万葉等に依ハ太濁ハ
ぬむ人い清ハまりきこうう
ニ或抄ハ春霞ハ清ハ清ハ首其ハ天ハし山ハ明白
ハ入てふると白妙の衣さらせうとハしるハと

いつゝい白めの詞とゝん得さうひ旦古事乃相とん
なる人の玉さうる玉沢とて
春雨ふる衣と濡つけて幾日ほとゝんてふれかく山
佐保姫の衣ゆとつゝ古れ日の光りは高してのかく山
大井川ゆとゝぬ井せよあのとさんなきふりと衣ほとゝ
えらとゝ引れとゝ芦と高武い波と衣とゝんて
る白之高れ時て好明日よゝ白雪ゆ相い行ゆや万
葉よいとゝかくゝ心とゝさんよゝて緑ゝゝんなる山の
ゆと白衣といとゝんゝ冨士白山をい
雪高れ時て好も白雪ゆゝゝれいさもいとゝ

いひもゝてん古事ゆい実系とこを述ゆれさる
虚偽の詞あゝゝゝゝなる世乃人ゝゝゝゝもて
古事とゝゝ相いゝ或説よゝ三宮ハ白を
ゝゝ是いゝの説ゝゝ相ゝゝゝゝ
なゝの説ゝゝ仕万系ゝゝ
ゝゝ相ゝゝ相ゝゝ
ゝゝ芦上ゝゝゝゝ
是ハ実系ゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝ

譜

皇考天智天皇皇妃遠智娘 蘇我山田石川麿大臣女

天皇天武天皇皇妃也天皇四年三月即位八年

十二月遷都於藤原 大和国高市郡 以上日本紀よみ

文武天皇大寶二年十二月崩御しまつ
と續日本紀よりの

柿本人麻呂

足曳の山もゝ尾のたゝなはる尾の上にゝ鹿を
獨かもねん

萬葉集巻十一 寄物陳思 撰集

ふるゝらいなのゝ人もわま
うで独りねんとなけき入るかも

とゝふのしゝそのもきゝふゝしま山もの尾
とゝてゝひしらけ上句をとゝ八ゝ足日木能
山鳥許曽婆峯向尓嬬問為云とよみての外も
谷つゝてゝめるゝ中世も多くひゝれけ分
庭ゝて鳴てゝる志もゆゝとゝゝへゝれと
ゝゝナ七ゝ庭津鳥可雞乃垂尾乃乱尾乃
長心毛不所念鴨ゝも全くけ上句の
ひゝれい今も鳴ゝゝ
ゝへの人ゝゝゝ
右ゝ記ゝ片ゝ

[illegible]ひとてらしたまふの調とすることを
せるうてから序詞のいとまらされと相人の
下句のあるて上のいとをるまもひなき
他しとをるやうにひとてもとをとを
けいそのうちもとる仍てたゝへ人の序の
いとへるせるいあることを
こあしてるの詞元恭紀の歌は初めて西芦紀
言山行之時引足而歩也とつるい方歩集を巡りとる
ホとをるから説るん万葉字義を泥むへるの
なるれいるるを我新説もれとをるるに

雄尾ともよたをとよい
手の似まるるを雄と
花の假よとを之後
世人のあやうをとをて
てゝるとを

れいてを畧せう冠辞解をひるを長
さ六蘆を引皆木をふ
説い海ともとを
こ山をるをこのをとをるをといかれる花のもるれ
うう或説を上乃をとい雄と正聲ふらび下乃
とい尾と去聲を唱るとをいい穿をるう
万葉集を七を
庭津鳥可雞乃垂尾乃乱尾乃長心毛不所念鴨と
二津をう尾の美をるらしあれい今も二つをう
去声を唱へ
こをるい歌乃法をて下を清きかれと

同集ニ石乍布曜道ゆきふりかるもの
あれいたるのなくいはしるり　たるいたるの乗るの
とゐいたのあるようてゐるへれと　或説ニ加尾と云
しもとらとらむ　乱尾とせるとうを
尾と呼ふる河はとれるとゐとゐ　分あるようれ
船の流とうとゐとゐ時はとゐ　雲せるねるるる
都るくりしきと尤しかいいと古流ニ　流をつめるて
出り雅郎子といさいるつとゐ　流らきにけいんとさと
つと訓せるきの流と雲　つめるしなるつる
○長永夜乎ハ　雲せるてくいしかるさ
しなる乃雲流ゐうとゐ　夜とうして或説ニ　ハるく
迦流之始せうまきとゐ　とさてはゐて志と紀の
夜とゐむへくゐ迦也　しかに
とうゐうとゐる紀ニ　神代紀ニ一の美菩牙
れい　宇麻志可斯訶備と也

れいはくうまし　とゐうまし　とゐうまし
ゐるもうまきとゐ　迦とゐる
○かも　神乃加い疑て歎とる　辞ゐるもい助辞
ゐう尤ゐもと云詞ニ疑乃加と　又始ニ哉と
いるる同しなもあり　所ニようて　哉乃
笑仲万葉ニかるくいる　流ゐるとゐい　流ゐる
哉のゐいゐれと　ゐ仮ゐを　ゐるかもと　訓とゐし
○此ゐいたるいるわく　万葉集巻の十一　寄物陳
思歌中ニ　仮けるの　ゐれ初ニ寄物陳思と　訓の多く
ゐ甚下ゐる　ゐて甚次ニ　別の訓あり　甚下ニ又け訓の多ゐ
ゐ乃内ニ

念友念毛金津足檜木之山鳥尾之永此夜
乎或本歌曰

足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜手一鴨
将宿とゝ云て太の頭に白石九十二首或本の歌云の中に
七夕の花よ太一首い上人麻呂の歌中よ人丸集に
し句〳〵換ゝ有ゝ又載とあるて已下い皆紀氏
ゝ已下分百七十三首よりしあ〳〵のゝ〳〵
ゝ入ゝ有りゝ〳〵しけるを見て知へしけゝ定めて
人まろ紀ゝい者〳〵れぬいゝみ人〳〵ゝとゝ〳〵て
つきし

いはゆしてゝ云て言後よんと学ぶ注世の後い即言後の通りと彼ゝ
書ゝつり

譜

新撰姓氏録云柿本臣大春日臣同祖天足彦国押人
命之後也按古事記天押帯日子命乃後也其御弟大和
帯日子国押人命ハ御弟ゝ天下と治ゝて
孝昭天皇ゝ御名ゝ遠ゝ有ゝ紀考へし敏達天皇御世依家門有柿樹為柿
本臣氏此氏の人天武紀ゝ柿本臣猿と云人ゝ
同治時ゝ朝臣と改ゝるゝ其後柿本朝
臣と称せり後ゝ続日本紀ゝ氏の人三四人ゝ有ゝ続日本後紀ゝ
柿本安永三代実録ゝ柿本枝成と云人ゝ
人万呂ハ此親族ゝ成ゝ人万呂続日本紀ゝ
ゝ者流ゝ
人万呂と云ゝ
外ゝ古書ゝ
附會せる注書
藤原の朝の人
是ゝ
紀ゝ人万呂と云人ゝ
こゝ人万葉集の
他姓ゝ
他書ゝ
世
世ゝ
時世
至ゝ

も考うるそれゝ云方葉第二日並子皇子か
れなせる時人まろ乃傷をりて詠れ
る歌い持統天皇朱鳥三年四月うり是より
先石見より書よつうをくり都へ登るる時の
長歌二首あり飛鳥宮といふ下にあり歌
もらしたちの中にまるひとあれい朱鳥
元年二年此間の九月の比より天武の朝より石
見の属官なるべくひくられるるや大寶の比い
都ふありて其後まる石見へくりて死せり
れれい持統文武両朝の人ふ給仕して古今

集序は天海天皇大同天子此時三位なるよ
しんくるい人まろ死て百年より後なり
云々人麿ある定家卿も古今集序のときも方
業集披見せる人の筆よりいふてさるなる書
なるうされも古今集序の此ふ乃文まる
別ふ論とべきこと多くれいかの序法ふ乗しく
ゝ故ふ暫くおきあ萬葉集巻二ふ藤原
宮御宇天皇代と表して柳本朝臣人麿在石
見国臨死時自傷作哥まる柳本朝臣人麿死時
妻依羅娘子作哥と此二ふ死とも今の法ふ

三位已上曰薨五位以上曰卒六位已下曰死と云て
国史及万葉集等の古法一同なれ六位已下
の人なる事明なり三位乃人なりい必国史に
載つるを伝るも正史なれゆるるなり大同
巻ゑ高市皇子尊殯宮乃時し人よわるも所
の反歌ふ舎人い泊りとしあるるるれいその
ぬい舎人りてを坂石人ゑ任せ〻旅るなれ
ゑ万葉集中とら〻考て知へ〻且三位乃
人石人ゑて薨せ〻れんこも疑を起とへ
き事なるこをわし所人まろれ他と定かるれい

此論も言益なれと童れ高ゑとすくふの〻秀
〻歌葉及古今集等ゑ見し

山部赤人

田子乃浦ゑ打出てみしい白妙ゑ富士乃高ねゑ雪ハ降ける
万葉集巻三 山部宿祢赤人望不盡山歌一首并
短歌 新古今集の名そり 脱不知て入
田子之浦従打出而見者真白衣不尽能高嶺乃雪
波零家留此所ハ先地の板とそりて なゑ云と求

受へ田子浦に駿河国廬原郡を続日本紀天平勝宝二年三月云駿河国
従五位下橘原遠東人等於部内廬原郡多胡浦濱獲黄金軟之云
万葉集巻三云田口益人大夫任駿河国司時続日本紀和銅元年三月此任あり 至駿河
清見崎作哥二首
廬原乃清見之崎乃見穂乃浦乃寛見乍物思毛奈信
晝見騰不飽田兒浦大王之命恐夜見鶴鴨 又神名式云
廬原郡御穂三代実録作御廬 神社和名抄云駿河国廬原郡廬原息津
とあらんと参考して清見の田子同所にて清見の東にて
さて田子のうらうらなる山に富士郡にさて隣郡なれば
いとうら

後世人駿河なる田子越中なる多枯とものしおもへり左の史よりなる
よ其彼字出る
さいはひなることもかゝる

かゝる色にて遠きうらさびたる古の海辺にかゝれる
清き坂の山陰に猪鹿の鳴くなり来てそ
さて山の東より出れい不盡に向ふ人行く道東南西
る入海の松かの洞庭湖やうなるふ こゝ後則田子の浦うら
こゝ東の入口にて可いとゝ
さて此田児の浦より 後俗なるこゝろ 西の山陰を 打ゆくられい不盡
乃高ねの雪に四ゝ天外に秀るとこいとゝとゝて
感しあるさまうら何のともいとて有のまゝ乃へ
多るふ其時其地其情おもひ清うら抜ぬるゆ古の
ゆなる地うら赤人い能守ゆ神なるゆけ三てよ
て も知らん 悠然視南山とよもれ作うとゝ人伝
れとかれい其ゝ事ゝいかゝ山陰

ようこおてんせ　ゆることなれい其義はなうこう　悠然と
してといらつうのんをはせるゆ似れい相伝れる西うう
しかいの句ゑのまま
るう似るゑのなきうう
口田児の浦従乃注の字ない古書よゆと訓して即よ
ひとしいるゆなれいしかのもゑこれうらゆと漢へ
されいかの田児の浦乃山注の様伝して山注と東
よ山おてんてるゆも明うは人い詞の再うう
を通ふとて直一句のれを分ゑ意を抜これ一う
　山出而見者のうらいふりかきてひれてよ
類の発語して他会うき抜の下て用る詞う
出而いでてと従字よりうう分ゑもあれいうう

ててんれいてもよむへしされても同一万葉ふも
奈良朝のはよいいてくもいうう後人今漢分いて
してよしきうう古文を訓るふいこのこいうもへうい
は世のふふ伝うんとて古文と評る説も伝うもひ
ゑゑれわう

口玉白衣いまいるまでそとゑもむへしてとひく
落句よりるゑゑめてるうう新古今集よ第三句
を白妙衣句と注てゑて記ゑいと伝るる
万葉集をいんと人乃はづうなとひ伝ることを
入られるうへ一右新古今集よりてはは人
しかを注てりてうう此雪乃上よゆまきう

清こんるあるんとつて是源氏物語なる今と
ふりつて松ちのいりちわとうあるとこる
をりひとれるもの不盡のねの雪ゆる時を満天
雲こちてそこらこんること彼今時てを
ふるも四見の浦ちうらゆへうすすと天と摩せる
山と庭上の京ちてちらに違の多かるへし其
上是東ちうる時ゆとこんなるりなる前を
いかくなるべ日しく清ちうをふこるとい
聊くる流もかるとぬなうり彼郷い古えとぬ
ちていんをちくゆうしるへし

を江路や真野乃濱辺ちこ海ちを沈良の高松
乃花をこんるうかちをちをちをしうう
い日ゆのかりつくく例ゆ万葉集ニ日ゆの
藤原之路多信能藤江浦阿良多信能布知延なと
清ばりい苔布の苔て白服の袖と冠しめ
多り彼家も藤いふちれ濁り不ていゆの濁
ちて紅れいなて白ちへの不盡といはけぎ
るゆり沒や不ちを雪消ぬ山ちれいなぬ
てて色をちうこしてゆ彼ゆ清くるいゆ
姫世の伝乃ちとるこるをを白ちををふい

仕まつりるよりて世ひろまりて
其人ゝる時の松おのもやらもつる牧海
辨さへなるを多くられどうらいしさふのら
一波万葉集巻三
相坂手ヲ出而見者淡海之海白木綿花乎波
立渡
譜
山部宿祢應神天皇紀云五年八月云令諸国定海人及山
守部と也權興ゝる人ゝて顕宗天皇元年来目部小楯と
ふ人ゝ山部連姓を賜ふ也後天武天皇十三年ゝ沒て

宿祢と称ふ以上日本紀 赤人も其姓氏ゝて萬葉
集中ゝ赤山部宿祢赤人と書ゝ也ゝ古今集
古字序ゝ山邊と書ゝ故人別れ似ゝ也ゝ書法
ゝ有ゝ山邊氏ゝ續日本紀ゝ光仁天皇寶龜
年中ゝ和氣王及諸王等賜姓山邊真人ゝて氏
かゝ称ゝ芸ゝ別ゝ同紀延暦四年九月詔曰先帝
御名白壁及朕名山部自今以後宜並改避於是改姓
白髪部為真髪部山部為山ゝ山邊ハ蓋唱へ
のゝ也ゝ同延暦十二年紀ゝ山邊宿禰人春
日ゝふ人姓氏ゝもふとゝれまゝて入ゝ後

世も山部と也麻信山邊と也麻乃信と訓来
ぬるいとのとうちゆゑ人へし
○赤人も万葉集の外に示えるに父祖官位も
考へる所なし是亦外國乃屬官なる東國に
より所万葉集中に多く時世に方ゆ集分ちて
神亀元年より天平八年までの所作に多れい
ぬる聖武の御時とし上徒に山邊那
東國にてらしも侍れいけむとうとに人うを
へしも侍なの説なりいとく大和國も山邊那
ゆりけ氏山邊よあるうに且其おこれるなと日本紀
とあるところへし次上四巻に万葉集の所作に万葉集貞
観の御時に撰ぶ撰の時代はつるく後る書にて東未
定なりなく定海なぶうれる撰集以来の名ちとうる

所多くい法りあり御仙元律師なる法師と参考しられ
とし又秋法字多し況こと別のあるまうなりの多へし又それ
上より時世よりるうとして時の御ものなりて撰に入られ
してたまを法れるれ多し近世後世に仲の説に三四
と定やられと定れの元れいるひ多し東麻呂の海る
六七階なりしう今俗にうとらへへ八九階なるちし
ことしとふおさていたる人とそうることれし

猿丸大夫

奥山のもみちふしを鳴鹿の声聞時て秋の哀しな

古今集秋上　是貞親王家に所会の名ある人

ちうし次

凡秋いかるを時なを奥山に落葉をふしを

て庶乃鳴き聞ある時こそ文かかれきこと
の枝ふいあをしたの秋と過しとおりひつ
るいうなきうの鳴ふこうりうとうう
○おく山とあるふうて紅葉は遅迷のう
まて論とるいはゆの分れこうう庶い手まう
せてい奥山乃とのかるかるかるる方集ない庶紙
いるおく山ともひるるるう多一甚上奥山
ハ秋乃日かしも紅ふかれたとりく
し發句とおせるかるへし
○ふこうりてい庶の句ふこうりてかとるいふ

ちやしけ分新撰万葉集ニ入ル其花の詩ニ秋山
寂〻葉零〻麋鹿鳴音数處聆勝地尋来遊宴處無
明無酒意猶冷とありあて此書い詩をもて分
乃注ニせるふ此句ふるふ奥山ニ入ル落葉を人
のふ分て庶の句をかるとかるとかるふ
ふ〻紅山ハ細雨小木も紅葉とれも落葉零こと
あれい落葉とこの句へ又此分秋の上乃詩て
入れも庶の分乃篇ふて伝れい季秋の分
ふも論ふ此前ふ出乃篇ふも紅葉とよ
る分あるて句へし

この船きゝおそれ憐のいろうて多くこゝと云
うるをかなむむとゝふる用式人の面白き
とゝふ事なりとゝいへともおりろぶとゝふい
まゝしき程のつゝそれ詞ふかなひがゝし
こゝきゝそれとりしいふ沒とる法ゝう秋の万いろ
差別とる法ゝう

譜

官姓父祖等所見如之光院殿説ゝ元明天皇
乃此の人ゝうとゝあるい考られし故ゝ死日

本紀天武天皇十一年二月柿本臣猿等十餘人
ゝ小錦下九位を授られ後日本紀ゝ元明天皇
和銅元年ゝ從四位下柿本朝臣佐留卒ゝと見て
多くい此人のゝとゝまるゝ
こまるゝ古人伝のゝ
して名とせう續日本紀ゝ安中下世ゝ女もゝうゝを
ゝまるゝとゝいつるゝ
物語やゝも才氣あるゝ
つ大丈とゝい五位以上乃人を称英していふ語
公式令喚辞の條ゝそゝうへし 但人万呂い五位以上ゝゝ

れも先師としてふかくむかし古今集
をまなびたまへるなるべし
○此所古今集の時ふるしとられさる所也
いかなる説を持くゝ猶まろの所ゝるよりを
ゝるゝ所へ秘伝とゝ物をはなしける
書よいかゝ附云乃説なれい論ゝ多次
その物くゝ中小一つといくゝ猶まろ前
道鏡ゝとゝゝ道猶い繼日本紀ゝて
ゝい河内の國の一小伝ゝ物ゝ
仁天皇寶龜三年ゝ配所下毗玉薬師寺ゝて
死ゝ国史ゝ見れい仁和のみかゝ皇

子是貞親王乃所合ゝ生ゝきゝ
ゝ海も弘仁已後のゝ物ゝを古書ゝ
ゝ人い其時世のゝをもゝき海へとして
みゝ物ゝ附ゝ乃説を物て古今集も
加ていみゝすゝゝを物せゝれい奥
山ゝゝ海いゝ人ゝゝれめゝ物ゝ伝去
ゝゝゝゝて伝乃あゝき事ゝあん

中納言家持

為鵲乃渡せるはしにおく霜の白きを見れば夜ぞふけにける

新古今集冬　題しらず

為鵲橋い淮南子よりおこれり　禁中をかくいふ

なれば是い則嚴粛なる宮闈の寒氣を殿庭御橋等に霜の白きをみて夜の更ることをしるとなり

ふるい霜のいつもあれど月もなきを夜の更ぬるとなるべし

京乃しるなる物ゆゑ乃ねるとふ物ゆゑ乃ふくとつゆて乃るりつるをのへしるつゆ

改家集三に夜ハフケニケリと有

河前よりある清橋をとんでしらめる物をいふ

淮南子云烏鵲填河成橋以渡織女此語を以て禁中をかくいふ

唐詩に奉和初春幸太平公主南莊応制　薛曉道作　鳳凰樓下交天仗烏鵲橋邊敞御筵同題　李邕作　傳聞銀漢支機石復見金輿出紫微織女橋邊烏鵲起仙人樓上鳳凰飛

これ公主の家なれい禁中と同じくいふ

凡天子を日よりあるくまるらを清ふ

禁中を紫微北極といひ御橋復道をも星橋烏鵲橋ともいふ

一名ふとう四ともも七

月七日乃外かさてきさせしとゆるい大和和
語よ第の大将定国郷たりおほい殿時平へまう
て給つり乃外さて酒ゆまいり酔て表
ゆくゆくゆくもおく不三ゆうゆ和しのゆう
おくおくおくおていつくふ和しのゆる後ゆう
あんゆくゆくしゆくひて格ゆありさゆくゆ
壬生忠峯清ゆもふあゆみゆくのゆくゆ松
ゆゆゆゆゆゆゆさまのゆゆゆ清せゆくゆこゆて
鶴のゆくせる橋の表乃上を和くふゆ分ゆくゆゆ
ゆんのゆふゆとゆもゆあゆ和おくゆあゆれゆ

とゆくゆおゆゆてゆを迷いゆこゆ和しのゆ
仮ゆくゆかゆく夜文てゆこゆまいゆくゆゆゆゆと
大江乃のゆゆゆふゆこゆゆて行ゆゆゆの次
てゆい行ゆを梅津中ゆう清橋の宮殿今日宮城川前橋清ナ
ゆおふゆゆ表をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆふま
ゆてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆれい即梅津中ゆゆゆ
ゆ明ゆかゆゆ良サ将の五節の舞ゆゆゆて
ゆまれゆゆも別ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆい
通ゆてゆゆ

式説よ寒秋の天乃暁の京ゆゆゆゆ設て

なるがゆえに物はいつるい虚を人は動ずる物心
むかしは分るもの多くへ物とせるい実京乃
ようい侍らねと多くはゆえるりなる物とよ
然るに侍実京ものとこそ人をもとうさせる
なりとおく乗乃とあるり又い天ふ漏さ
るとこそ乗乃氣物さ汎まてうて
実の京よおく物ぬるねい実る物上ゆ物
多る乗るうるといいるを人れどもとよ
かるとさるるるゆうるとうるりよへし古今序

鶯乃囀ゆ乗るうるを物と移ん見まらるて
物をるるやうさるるかるれのゆ会れ物ゆ乗物ん
右二首いるるるいものつりれい実ゆて
るるる所ゆい侍ゆと又万葉集第十ゆ泳霜
天飛也雁之翅乃覆羽之何處漏香霜之零
異字ゆい想像しるるるるる古所いるるく
るるるゆて感情あるるる後世のるるく
るるるいん侍のるるるるるあるるるるる
ハ解釈ゆ遠ひ侍ゆる

譜

續日本紀云延暦四年八月云々中納言従三位
大伴宿祢家持死是小死と書るい除名して庶人
ありて此書はせるなり故に位已下庶人よ
りて此書はせるなり祖父大納言贈従
人まうをうるとあるとあるべし
二位安麻呂父大納言従二位旅人云々又云同十
一年出家持郷為陸奥按察使居無幾拜中納言死後
二十餘日其屍未葬大伴継人竹良等殺種継事
發覚下獄案験之事連家持等田昱追除名其
息永主並處流かるべしと後に伴善男家持の
罪なるべしと申て三位に復せられ

上世にある分仙家集と
云ふ歌人共云ふことの
らうまの人々さも侍
下とれたち侍る人々
のはなに作らるるなり
まして人まろ赤人家持
猶まろことのはことと
ときさるなり
昔のまとろの人
の作り侍るなり
けり

しかれば粉よ尺西中納言の友とくべし
まりたるまはまよ尺くまそこてよ友とそるは
おかつるまし又け河家集よいあまと万葉集
よいくさるとはいくさ家持の作よいあるさら
へ今の万葉集は古万葉よ家持の家集
と指補せるはとんもれい他よけ人の家集とて
あるい偽作なる説とも有

安倍仲麻呂

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に月出
古今集　羇旅　なるこして月とそんてよ

ゆる

土佐日記云 廿五の月あかう山のこも影くら
海乃中ゆくあくるかやう影なるをそやむ
あ魚の仲麻呂といひける人いかりこと
ゆて帰京する時よみ給へる歌なりかの
国の人なりけむとそかこれ乃
かくこと作り給へる真月を海ゆで
おりる岩をこんてで仲まろのぬしとうまよい
かくる所をこん沖代なう神もよみ給へ今
も上中下の人もかくる別をしらこ

ひもあり世しもあることないらむとそよわう
りる所

去海京ふうさけこんれいこと
今秋のかをおりひやうく
故て山乃をふん月影れと海ゆ影あ
こそいれこしいの君之めて詠そこの抵明
らかう日なに帰る紅色とへな津そうかと
の海京ち月の出るうゆ色でも国乃三笠乃山
よあつる月影ちとかう光てゆひやうる万里同
客情ひ帰くしかくしゆんとなるよ

をくるふれば月のあらはれいかのふかさの山
とあるは月なるべしとは義好れい第二三乃白れ
なる詞あらぬ抜うれと古所はいさるいと好の
例あるこいかもい疑のかもうら且は、もとふい日月
いいつこも用ひきい初好うら作りまとをき異
國てはは情なかしーとうとひ多ふいよ
く感慨あるうらを指乃所よ見はとの字
い古今いまさきかはれ
ロ天乃京は天の廣ま好るとこふ海京好京の
京は用ひ

蔦云今紀土佐日記ニ歌ルニ
アラノハラハ海ノハラモ海アラ
ルテアマイフ河波田ノ地
名ニ里ノアマイフ所アリ
是ハ里ヘ海ノ入込タルモ
ルヨシテ知ベシ

あらいうらとは歌て多
語うらさけい方集或は祝詞をは離も
放も詠ともうら異朝をの字を聲ふ唱ふ
言ふ用ひ知てこうらさけをもれてをき
とは万葉集巻二天皇聖躬不豫時太后
天原振放見者大王乃御寿者長久天地有同巻
十五旋頭哥
安麻能波良布里作氣見礼者欲曽布気尓気流与
之恵也之比等里奴流欲波安氣婆安氣奴等母ゑ
らの白活うら或説ふうらあきてんること好う

とふは偏なり万葉集巻六に振仰而若月見者
と書るは是はそらにかゝれる月なれば仰く仰の
字を用ひたる也 さるを万葉を意も得ぬ
人々る人の説は字義に拘りて誤れること多
きなり 又或説に振提んれはの義なる故に放
るは甚誤れり 右の一首まて係に説とりせる
なれと通せさる也 且提んるといふことも前詞
にはゆかぬとも此はさる也とおもはれん
もたまふるひなり 万葉集巻二 番由毛見放(ツハミモミサケ)
山乎 同巻四 汝乎(ナヲト)吾乎(ワヲト)人曽離奈流(サクナル) 同巻十三

攷追考 春日なるは
二 阿倍仲麻呂とすれ
は当山なるといふ事

長歌 大殿矣振放見者(オホトノヲフリサケミレハ) これらいって 提の心といはん
やすし外にいふは誤なし
この第三句は右同巻七旋頭歌なり
春日在(カスカナル)三笠乃山二月船出之 同巻十二に春
日在三笠山尓月母出奴可母云々 同巻十三にも
句例あり
古今集の古注の文は土佐日記によりて後人の云
へるなれはこゝに略せり 且古今集に
天の原とあるを日紀よりは海原とかれたる詞の上下同しく
て廿三字の中にかはれるは二つ乃みにてあやまりなるへし
ちか頃振放仰を… 古今集本文の詞なりとて是月
とかそといふかれたるは日紀の文乃中まれなるこの流る
ゝ例これとおなし古今集の方よりてさるもあるへく
いそくるしくれせれさらんにとおもひて此の月日の
つこまり月をみそてわかる今は海に隔てらるるとおもひ
と日記よりはそらかはりけむかひて海原とあるにつきたるか

或人曰古今集序注に撰者の第五番にあり大師と云て
くしくい左大臣せ[illegible]と云曰し左大臣とへくいとは
の人乃ち[illegible]の誤り作る[illegible]人のもとるを序より所かりて四
ケ條とうの誤り拾人して初へ
注論一不あり拾人して
ふりよ左大臣と[illegible]
○或説に云山[illegible]の月と[illegible]
源てのるいさてあんう[illegible]万葉集の月
尺れい月しかう山[illegible]てい君あり[illegible]文選
月賦に隔千里兮共明月[illegible]和漢[illegible]
いつこにも[illegible]の月かとしいあり[illegible]
とう時[illegible]の海[illegible]月[illegible]
[illegible]

金吾君へ[illegible]

譜

安倍朝臣 昔八阿閑と[illegible]
海諱[illegible]

新撰姓氏録

云孝元天皇皇子大彦命之後也と仲万呂の文
祖八所見如

○此の留学生として唐に遣はされし霊亀
二年八月多治比真人県主等遣唐使の時なり
續日本紀に此時留学生と記さるゝ世の史唐出等に
なる此年月なること知られ[illegible]或説に船[illegible]の子又いけ人と同
船せりとゝ推量の説[illegible]
こゝほく謬説多し次下[illegible]
しるし舊唐書東夷傳去開元初又遣使来朝
因清儒士授経云〻就鴻臚寺教之乃遣玄默
潤恒布以為東脩之禮題云白亀元年潤布云
〻其偏使朝臣仲満仲満即[illegible]

さるありさればよいは改名て衡となしぬるへし　慕中国
朝衡の外ハ外臣の外ヒ即氏とせるものなり
之風因留不去云〻留京師五十年云〻上元
中擢衡為左散騎常侍鎮南都護右ニ白亀と
ある霊亀ハ年号なり　紀ニ亀に元亀の年号ニ称せしハ左眼白右眼赤腹ニ赤白両点あると云〻又後ニ神亀と
称せるハ白亀也唐志ニ流を入強て白亀とある奴ハ〻さるらのるすまし
調布 諸国より調貢せる布之賦役令ニ見ゆ を持て行しねるう旦唐開元三年ハ日本の
霊亀元年ニあたる霊亀二年より上元二年まで
凡四十六年をかぞふれハ五十年とかゝるもふと
せとさる人日本へ帰らんとして明州の津より出て
太のあひだ其後船ハしつれども風波ニ過て又かの

土へ吹よせられて驩州の地ニ過て年を経て
終ニ又帰らず唐ニ至して終ニ唐ニて身まかれ
しや　或説ニ帰朝せしといへり 続日紀古今左注なとまことなる
もいつれ謂うる方ありて帰朝せんとして舟出せる
まつの事ハあれと日本へ来てる事ハ絶てなし旦帰朝の時天平勝
宝四年ニ遣唐使ニて又入唐せるうちにも非也其度の大使ハ藤
原朝臣清河郷ニて副使已下留学生まで続日本紀ニ載て明らか
なる事なしかつかんとせし時の同船ハ右の清河卿従者の時のことなる
へし清河も吹よせられて帰らんとせし時のことハ右の
紀ニ唐ニて薨せしといへり
方のことを　文苑英華巻二百九十六 行 遣朝衡作
銜命将辞国非才忝侍臣 中略 平生一宝剣留贈結交人
ことハ留別の詩もあり　是京師にてのことなり　又包佶送日本国
聘賀使晁臣卿東帰ニ皇朝にハ留学生として使のかへし遣き
しことと見へて其といふことハ

を一国の使とおもふ人〻故に古の旧唐書の文も和文と
うつり侘るもひろく晁音朝臣れいこれも外国の文字ふ
しおもしろき王維の排律序等をも知へしこれ波
まあひて溺死せりと唐にて聞えしを李白の
小哭晁臣卿衡とて日本晁卿辞帝都征帆一片繞蓬
壺明月不帰沉碧海白雲秋色満蒼梧物歌
正然の小海のおもひのこれふいあるてきかへさ
れく海のかなたにうせ給ふ
日本紀云宝亀十年五月丙寅前学生阿倍朝臣仲麻
呂在唐而亡家口偏之葬礼有敕勅賜東絶一百匹白
綿三百屯（唐使来朝ゼラ其使ニ贈賜ス）其後ノ續日本紀云天平宝字三年五月戊
申便附聘唐使贈遣（往ル）征歳銜本朝命入唐使并留学
等在彼身歿者八人位記以慰幽魂其詔曰云〻故
留学問贈従二位安倍朝臣仲満大唐光禄大夫
右散騎常侍兼御史中丞北海郡開国公潞州大都
督朝衡可贈正二品身渉鯨波業成麟角詞峰聳
峻学海揚瀾顕位斯昇英聲已播如何不愍莫遂
言帰唯有於天之章長傳擲地之響云〻右の詔書
を参考してこれ人の偽を甚法説あるべ
しこれ〻〻

喜撰法師

とう居い所のうしとうとむしやうちやうと人のこと
古今集雜下題しらず
平安城乃巽形る宇治山ハ幽居の主に得て如
是すなわち物るハ桂ハ山と名付て世俗うちやう山
と世人いふ名のしてかくなるハあ
らぬ所とてあるハ桂ハいひ伝へ荷田在
満雜記世人のうふるといふ山を世俗うちやう山と人へ
しわらとてふをとかてゆるうちにい
ふ歌うとをとふ

きしいくらしいとうへい直ハ名をいひてて
毎ことに名所をとるなしと乃奇特へ
人ハとふとの詩ハ流むへうと世と
うとしふうう人のうちやうといふつけて
とと古今集序ハ歌ハ形ぬとて
ものへ三ハ人ハ東世とのとてハ流
男ハるいへへきハあぬと中
古乃仙ハ世のけ伝とくさーと名とうち
ハ身をうなるとと乃流けのしゆとい
さし流いとれあうこハいうとうとむの用流ハい

かくるきゆもかくるともといふ河うちとい
小説にはひてはりくるはりくる生滿腰
白の河と称くるはりくるそけるとうしふ白と
はしはくるはるあるとともに蕪石の動くはさと
らんあるは深淵かや源氏物語にうしはる
はくるくるくるともとらるはもはるはもとはる
はるとはれ
○方角とあるはいはるはてらあ
○はるはるはのはるはのはさはのはもさはの
とるとはるはは同はとへく如是とはるはう

万葉集巻一に然之毛将有登一云如是毛安良無等　これ
はるはる
○高山はは抵説に人はもとはるはは人はは
はあるはるはるはるはは水はるはは水はは
忽一言はるはるはふはへくはは人の海はは
はるはとはは人はは人はんはあれと
牝はふはるはるはは聞えて行は実に源倫の
状のはるはるはは人はは
○俊仲云はは天王寺城に付て観人乃
釋に王郎心王舎郎心王舎郎五蘊とはるはは引く部

八主舎城のこうりゅうもとあるいてよかりしと
く言葉の沈淪するとかの信心密宗の学者
もてさかくしつうさるを浮せる者とふい皆
世のさまして加て人ゐるさとへふものと
いうもと言ふ人さうもつしかも
ことをいふなるべく此の人もうつるの所ふい
このこむつるふくいうもまふふとそてよ
まぬとたまふい強て所云のことをうる
譜

系譜とあるものは名も古今集序ふい喜
撰弥姫式とふふ基泉元亨釋書ふ窺仙
とそうもてむしいの名の文字をあくふ
ぞうる所あれい必ずうれい定めがたし

小野小町

花の姿いうしはうふうれいうるうるもせるうるの先
古今集春下題して次
ふふ日ちゆうれをはしあんとおるひし花の

世をうれいうつまる地をひしてはえんてとるひ
まふかくなのうはるはるよりはなるとはなるとは
花にふる雨をうつしうるはれいはるうのもをを
もて詩をなせうに古今集は春のとのてはあ
りつはともあるよもてる詞をはは撰集は
人をうれて作りるはあのやまとのうは
也をて我者ものあるあるの人のは花もちりう
是今のかしてるとてもあへて又毒
客のおうへをとうあるとふさきも作へ
古今集はかの上よ

散花を行うらむの中は家あもあるあんはは
うをつねは我られうは撰者の志さを作
んうう
こうはるるいもの花のうをとも花のうのうを
も昔いうは植をつうふはをふも
かこうをふ移るは枝うは外へうはは
れの間しうもうぬ故は古今集の歌花の類
は入うう美葉美八惜秋の歌
秋山の黄及木葉の移を者更哉秋乎欲見世武と
のは古今集うも歌を移をんひうは

こゝろ故のうらいなひとう解しる辞ない歎の辞
うう
○徒に空しくとゝまる義用なるけ二法おか
りしくふるまてに死るるとこゝはる
野辺るるもむすくうるるもの類
と云て知へし
○おのれ思のあるはのおまるるを
ゝ毛日の義て意ものゝあるを毛日い
用とゝくとゝる義うる氣長うるとと
ふい人ふあてい日ゝくゝ成あるゝ義なる

と云ておゝ色ゝおのゝ人ゝ黙然ともたるのお
人ゝいるゝて人ゝくおむうるるを故人
おゝておるもゝうゝ人ゝ世ゝ
知ゝふ世のゝるゝるとゝのゝてゝるゝ先七郎
寿ゝへゝるゝるゝ行ゝるゝるゝ
いゝよゝく聽世のゝことゝおゝるゝとゝるゝはる
い古世の論ゝるゝゝまゝるゝ故ゝゝゝ時の行ゝと
もゝるゝいゝはゝまゝ
○或説はゝ行ゝいゝ毛ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ説ゝ武家の教ゝて分ゝ二重三重

のくとそうらい為はけあくくも為て是あり為
なり為曲ひとつことあるあり為とうとも
てなり為こと に今よまんよいさんはてよもへ
きうりくさ為ぬくうもこまれるもとも
あれうらよりそ乃ちるてうらうされも
凡の古ろい一云ろうるれとまれないくを
も曲のかされるるもあって今は何もさうう
今の数よりていうへの為と証へうとあ
おのうこのしをやめて古ろい解へ

譜

小野朝臣新撰姓氏録云大徳小野妹子家于近
江国滋賀郡小野村因以為氏小町乃様采女小
もち乃采女諸国の郡司（今云少領以上云）乃女姉姪ら
れ容色ら撰く貢とる事これ拾芥抄よい小
町ハ出羽郡司のむすめなりと云うされとしけ
さくえて沈淪れるるもと
○紫仲云父祖未詳古今よ小野貞樹とうしらい
せるあり同氏れれい親族うへ撰集
よ石上寺よて遍昭とうしかそ為る為あり伝

ニ付いまとゝ只遍照とある洞中の拙家の様
なるものなれ共文明れい文徳天皇の時分盛
なりしとつたへられ康秀の三河掾にまゐて
あるとゝ云ふ事もあるべしやとゝ思ふ事なり
云々文明なるものゝ帰本国屍在八十
ヨ江次第ゆ小町の墓ハ遠い中世迄相続つゝ
島欲と云ふ是いまゝ乃相とかゝ
いてあるゝ時ゝ
先つゝ作り物語
るなの人ゝ加筆ゝ
匡房卿ハ漢学文ハ深ゝ
時ゝ

学ハ心ゝ物ゝ足ゝ
和歌業生の問答ゝ
作ゝ代ゝ学ゝ
業平物ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
家属者経隨近官司推究当衆藏埋之傍於上書其形
状以防家属又軍防令云凡防人向防及番還在道有
身患亡其身死者隨便給棺焼埋 渭摂津以西而死亡者隨便焼埋其山城以東
者皆本属令来取若不来者然後焼埋之 違令の罪と云ふ事なり 古今集小小町の
あはれ撰集と同あり

とし不幸にして皆さるべきものも屍をはなれ
旅宿にんやとれば人うへくもたのさとわれ
彩色にして時をれい隨近の宮人拾ひ
とふ名をこい所の屍にとりのこしぬ人も
殆どとさめさむ同三万葉集を屍をとて作れるものこ
小橋にむるるぬふいとれまもとい浮世にてもいつこの人もれ
くて手やりうをあとれしうるんとのこしへい海を不及ものう
傷の尚といくて万葉集二十三番挽歌作者
娘子必葬吉野と云ものくい作者
れ物とあやしふ流言もきとや戸今云年八
十及篤疾給侍一人九十二人百歲五人かくて其国
友とりくめこてんるものとふ二百余の人
八岡寺にて見るにうかるる時世のにを
もとぬ人の伝ひ拾ひ信とへにに續日
本紀以下三代実録にくの使をんくに小所のにに今に
の物にに知れと知
ら流言と信て送と
なといひ物ものや
蟬丸 丸は俗世の俗にて哲とひく
書のにまろにに
是やこの行も逢るもとれはとるもとるもおの実
坂撰集雜一の国を居室を作りて作る
にの人とて
并三句いは撰集英集に入るも

はまとあり俗書にはあをはまとあるい結記の淫
ゑへし後てはまとゑへるゑへあり後の実に昔
うもれ平安城にはまちうきうかはあ入人のわひ
ちうきを行ふもの詞る人もちるもしらぬもお
れてあひはまとるいたやはあり後の実とい
ふを実のゑゑ詞てちるもしらぬも逆とひか
ゆうう旦はまいにはおるて逆とい詞も配
て云ゆるい云乃一拾てとれはまと逆はと
ゑ用ゆる逆次下ふるいりえちるい詞つ
ゑふも同し用ゆ拾て云いて詞はまと

上のりとい詞は配うて云るいうてはまるる
りえはとふゆるるてゆふをとをゑるふりるて
こ逆やこうとい詞い或説ゑ二つ拾あるはふお
くゆうと詞るいにるるれも詞ゆ外ゑ之其
拾こ拾ゑるうて拾ひはるること式のう逆
万葉集巻一越熟能山時阿閇皇女御作哥日並
皇子尊乃御妃なるる即位もて元明天皇とかうう
此也是能倭示四手者我恋流木路示有云名二
負勢能山こ拾倭示大和ゆ岡はきてとう
拾ゑて云る其ゑ逆やは紀の路ゑ逆ゑ山乃

おしてあるなるよさうなれども皆とかの
者よ文いもあれい夫婦ともいも名もとごとこと妻の
せとふこうい夫婦のせかう歌句ようの歌句又應と
る句法ようて入るも同しいのうけうう又同集巻十五
う

巨礼也古能名尓於布奈流川能宇頭之保尓云
中世よりこれなるこの天の和歌これやこれとこれよ
あつまを乃うれしけれとの類い出よいたし
あるもいとなる其和よりておのひとうある
ゆ八同しるこ又けるよ今者定離歌伊云石物よ
歌のそ尾造加せり乃ムとこんあり所とよいな

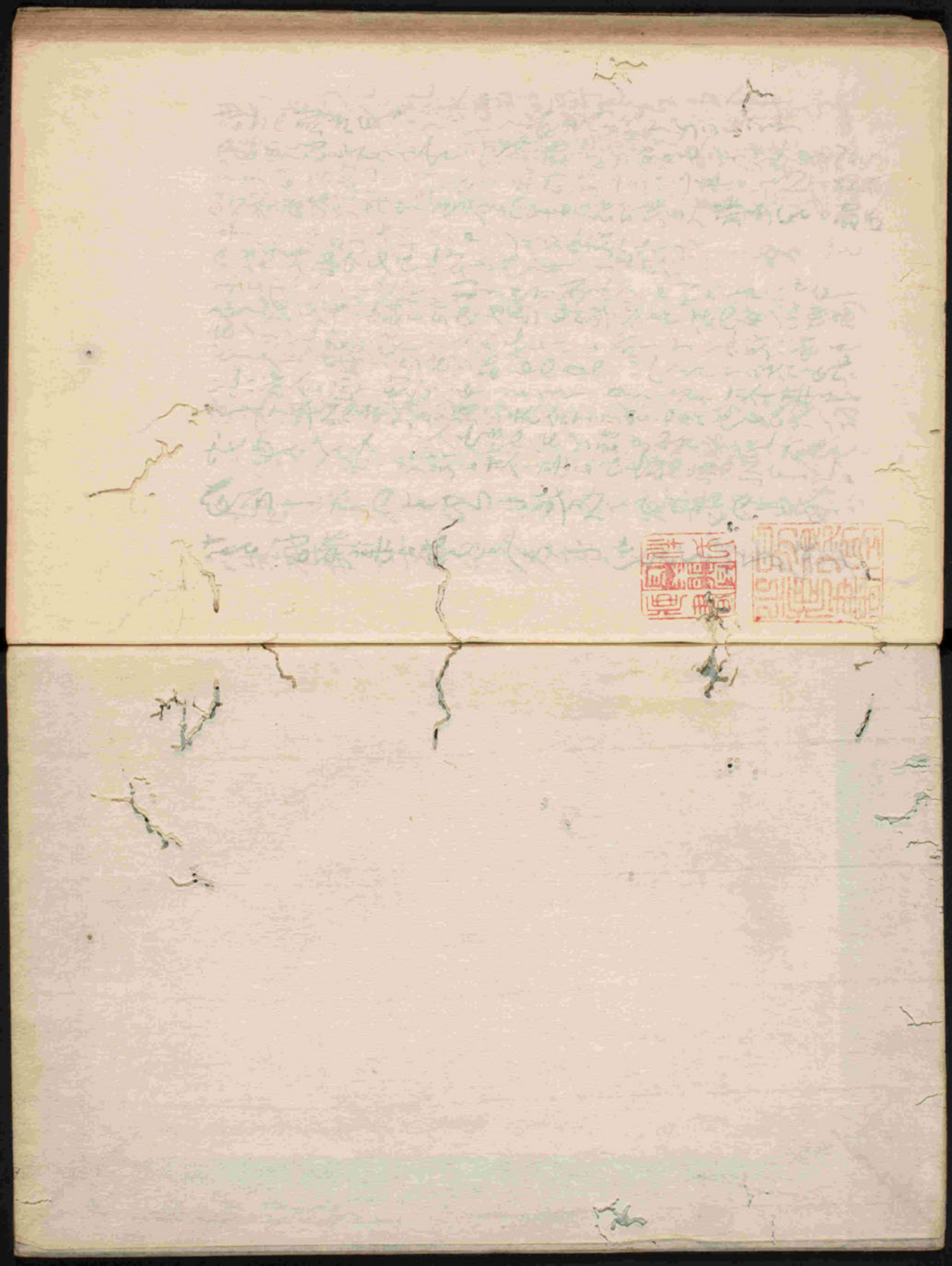
世古河とうこそかふるあうれよ附云せる
物うきを辛形ろ古所の法○ふうてふを
くとはりさるおしなとこと形ろ分も作り
うれをい上古の書を表しくせん人例て
ようて解へしふるむつうきこあうとふい法
相こ

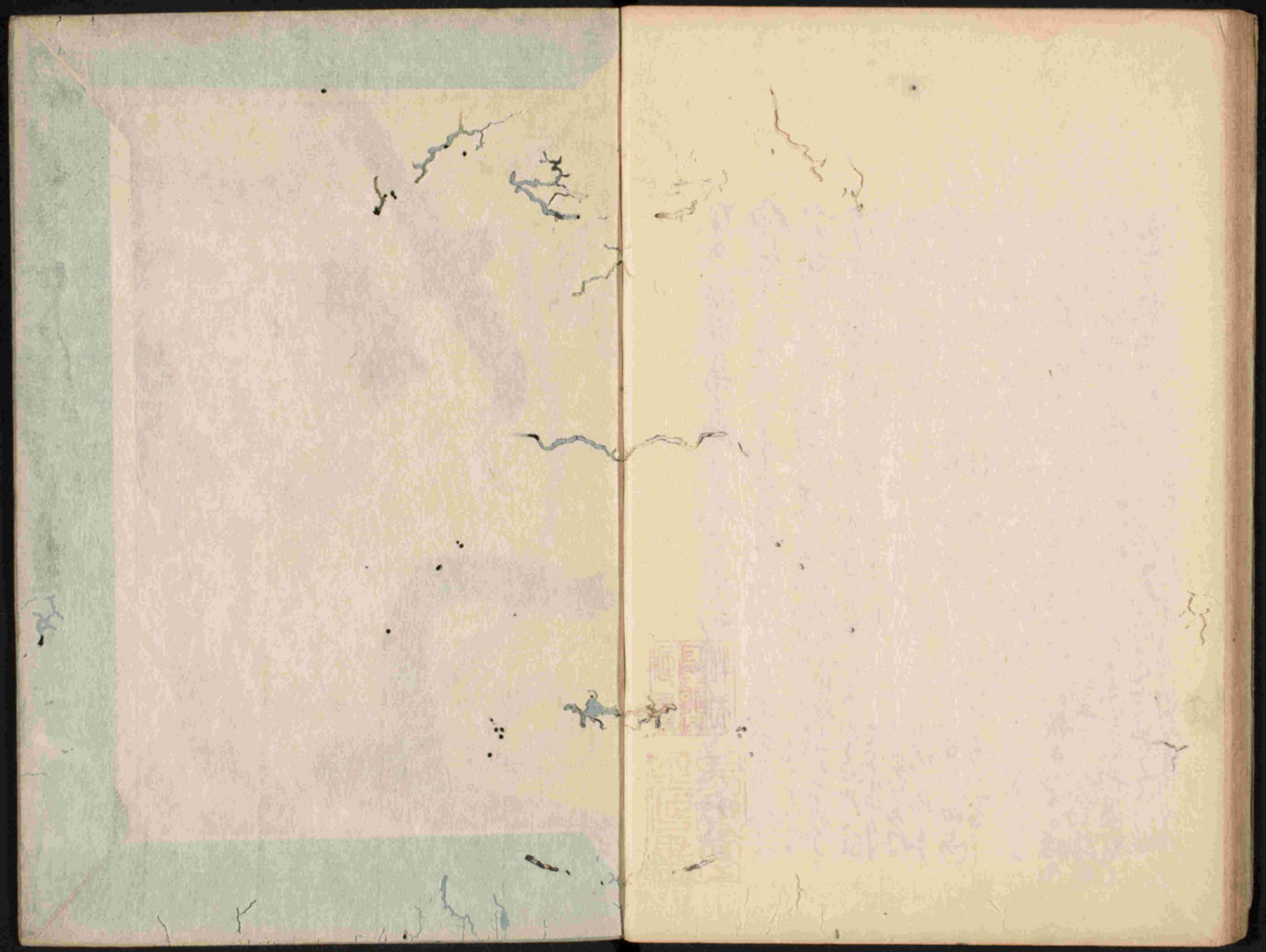
譜

父祖姓氏ふ考ふる所ふ雲吟云今者和
漢博雅三位と云り人い本帳とある日つふ
れる法師のようあやしけるよ思い名ふ

[illegible]とあれい流泉の曲と瞬丸ち伝へ[illegible]ふ
[illegible]ちてこひし[illegible]音物語[illegible]又云ふ撰集る
[illegible]分のち書る四きてれ人をえてとあれい有志る
[illegible]ぬとこそこの清源と云沼[illegible]ること
今掛る有人今ぬるい大この人をくち
[illegible]ふこと多り
[illegible]又延喜四乃宣ることいかもあるぬる
[illegible]かの宣るまるまいまきい出家[illegible]
もせしまちとのこし出へなるい延喜の宣る
八朱雀村上二帝の治見賞ること村上の勅撰

なる 撰集るあるまへくもかさるともおも
ぬ宣一方のすうと[illegible]も延喜ちい前のも乃と
中四ちとや 或説る[illegible]人ち初の[illegible]を撰丸ものこと[illegible]伝あう
[illegible]て延喜の帝[illegible]歌と考会てを宣るまいあるぬ沼と
ふい説今間て境と多[illegible]ちち集ち
[illegible]人[illegible]ことを[illegible]なるのの[illegible]伝して[illegible]説い海ち
[illegible]伝[illegible]試みち[illegible]
多[illegible]又あ[illegible]説る[illegible]の宣るい延喜ちおの宣る小町象
集る[illegible]のみこ[illegible]せ[illegible]ばとち[illegible]ぬ[illegible]るけ[illegible]ちいかる
の宣の秋北や又ち[illegible]坂も[illegible]
[illegible]ち[illegible]の[illegible]川の[illegible]
四ち人今吉和流ないち[illegible]参宣の宣る式部[illegible]新色つる姫丸
[illegible]ち坂山る伝ち[illegible]ち原物語[illegible]伝い[illegible]ち[illegible]
の秘曲い坂ち[illegible]丸を宣る[illegible]
坂世の流云[illegible]海[illegible]





絶対門外不出